

武蔵野日曜聖書講筵 年頭集会

野牛の角

――詩篇第92篇――

1985年1月6日

小池辰雄

神讚美の音楽 福音は楽音 不合理なるが故に我信ず 愛と信実 野牛の角のごとく 豊かに
 うるおい緑の色みちみちて 永遠の青年 聖霊の力

【詩篇92】

安息日あんそくにちにもちいる歌なり讚美なり

1 いとたかき者みなよエホバにかんしやし

聖名よきをほめたたうるは善よきかな

2 あしたに汝みづかのいつくしみをあらわし

夜々よなよななんじの眞実まことをあらわすに

3 十絃ととおのなりものと箏そうとをもちい

琴たえの妙ねなる音おとをもちいるはいと善よきかな

4 そはエホバよなんじその作爲みわざをもて

我をたのしませたまえり

我なんじの手みてのわざをよろこびほこらん

5 エホバよ汝みづかのみわざはおおなるかな

汝おののもろもろの思念おもひはいとふかし

6 無知者しれものはしることなく

愚おろなるものは之それをさとらず

7 悪あしきものは草くさのごとくもえいで

不義つみをおこなう衆庶もろもろはさかゆるとも

遂ついににはとこしえにほろびん

8 されどエホバよ汝はとこしえに高処たかきところにましますり

9 エホバよ吁ああなんじの仇あだあなんじの仇はほろびん

不義つみをおこなう者はことごとく散らされん

10 されど汝みづかわが角つのをたかくあげて

野の牛のつのごとくならしめたまえり

我はあたらしき膏あぶらをそそがれたり



11 又わが目はわが仇につきて願えることを見

わが耳はわれにさからいておこりたつ

悪をなすものにつきて願えることをききたり

12 義しきものは棕櫚の樹のごとく栄え

レバノンの香柏のごとくそだつべし

13 エホバの宮にうえられしものは

われらの神の大庭にさかえん

14 かれらは年老てなお果をむすび

豊かにうるおい緑の色みちみちて

15 エホバの直きものなることを示すべし

エホバはわが嚴なりエホバには不義なし

●神讚美の音楽

丑年を迎えたので、詩篇の中で牛が出てこないかと思って、92篇を発見しました。内容が大変いいので、これで今年の集会を始めようと、こう思った。

安息日にもちいる歌なり讚美なり

始めの「歌なり」という「歌」「ミズモール」という字は、私がよく訳している「絃歌」という、絃楽器伴奏の歌です。その次の「シール」という言葉は普通の「歌」。「ベヨーン ハッシャ バット」。「安息日」「シャバット」といいますね、あれはヘブライ語から来ている。「安息日のための歌」という。これはあとから付けた表題でしょうけれども、珍しい表題です。向こうの安息日は、金曜の夕方から土曜の夕方までがユダヤ教の安息日です。

いとたかき者よエホバにかんしやし

聖名をほめたたうるは善かな

「善いかな」「トーブ」という字が一番先に出てくる。「トーブ」というヘブライ語は「善い」という意味と、「美しい」意味と、両方持つている。「善美」というような。

「善いかな、ヤーヴェー、エホバに感謝すること」

それから、

「あなたの名前を絃楽器で歌うこと」

「エルヨーン」「いと高き者、至高者」という言葉が一番あとにヘブライの詩では出てきます。この「至高者」という字は「アガナー」「のぼりにのぼる」という言葉なんです。「上り詰めた者」という意味でしょうかね、この場合は。そこで

「至高者」「最高次元のひとつよ」

ということですよ。それは本当に善いことであると。ルッターは

「それは尊い事柄である」



と訳している。まあそれでもいいでしょうけれども。日本語としてやはり「いと高き者よ」が先にくるですね。しかし、ヘブライの詩では一番あとに来ている。

詩は——いつも申し上げているように——対句が非常に多い。「エホバに感謝する」と、「聖名を讃める」というのが対句になっているでしよ。

「ほめうたうのはまことに善いことです、いと高き者よ」と。

2 あしたに汝のいつくしみをあらわし

夜々よなよななんじの真実まことをあらわすに

「あした」とくると今度は「夜」となる。「いつくしみ」とくると「真実」ときた。

「朝ごとにまた夜ごとに」

「いつくしみと真実」というのはよく出てくる。「恵みとまこと」という言葉も出てきますね。この場合は、「恵み」という言葉とはちよつと違いますけれども、「愛」「ヘセッド」というのは一番大事な言葉の一つです。

「汝の愛をあらわし、夜々よなよななんじの真実まことをあらわす」

「真実」はあの「アーメン」という字と同じなんです。「エムナー」という字で、もともと「アーメン」「まことなるかな」という、その名詞が「エムナー」という。「汝の真実」の「真」はむしろ、「信仰」という字と同じなんです、このヘブライ語の「まこと」という字は。心を変えないで貫くことです。だから、「いつくしみとまこと」でもって正に両方で、「信愛」——日本語では信愛という言葉は熟していますけれども——ヘブライ語では「愛信」になる。

あなたの、神さまの愛をあらわし、

また神さまの信実まことを夜々あらわすのに、

3 十絃とおおのなりものと箏そうとをもちい

琴たえの妙なる音ねをもちいるはいと善よきかな

「いと善かな」はここにはないわけです。第1節の「善かな」にみなかかってくる。日本語としてはそれを入れたんですが。「十絃のなりもの」という、「なりもの」なんていう言葉はない。「十絃」でもないんです、本当は。「十絃」という訳は大変結構なんです、ただ「十」という字なんです。「十」という数字しか出てない。「十」というと分かるらしいね、ヘブライ人には。「十絃琴」のことなんです。「琴」はハープで、ヘブライ語では「ネーベル」といつて、前の方に「ネーベル アソール」という、「アソール」がこの「十」という字ですから。十の絃いとをもった——「絃」という字もない——「ネーベル」といえば絃のある琴ですから、「絃」という字は要らないんです。だから、「十の琴」というのは、琴が十あるのではないので、「十絃琴」のことを「十」という字一つで表している。「箏」は向こうで言うところ「リラ」です。一種の琴ですが、ギターみたいな。リラですね、これを「立琴」と訳してもいい。「妙なる音」というのは面白い訳し方をした。



「瞑想的な内容を琴でもって表す」

という、直訳するとそういうことなんです。一番あとの「キンノール」という字ですけれども、「キンノール」というのは今でいうとバイオリンに当たる。バイオリンみたいな絃楽器です。だから、ここに三種類の楽器が出てます。

要するに、非常に楽器を使つて、音楽的にたたえることが非常にふさわしいことだ、いいことだ、うるわしいことだ、ということを書いてあるわけです。マルチン・ルターも楽曲を自分で作った。あの『ルッター』（著作集第七巻『聖書の人ルター』1984年12月刊）の口絵にあつたでしょ。自分でもって歌を作り、曲も作つて、そして琵琶を弾きながらメラニンヒトンや子供たちと神を讃美した。音楽は神を讃美するものということをルッターは根本的に思っているわけですから。この神讃美の音、これはサタンが嫌うんです。だから、サタンをやつつけるには、この神讃美の音楽をやるにかぎるということ、ルッターはいつもそういうことを言つては、自分を励ましていた。

●福音は楽音

4 そはエホバよなんじその^{みわざ}作爲をもて

我をたのしませたまえり

我なんじの^{みて}手のわざをよろこびほくらん

非常に大事な句ですね。

「エホバよなんじその^{みわざ}作爲をもて我をたのしませ」

と。神さまの御業は^{みわざ}本当に楽しいと。それは見ることもあるし、また神さまの御業が自分を通して現れることでもある。どつちにしろそれは楽しいことだと。一番楽しいのは、神の御業を体現していくこと、また神の御業を本当に見ることに。

「なんじの^{みわざ}作爲をもて我をたのしませ」

と。本当のことは楽しいんです、みんな。楽しみをただ目的としてはいけないけれども、楽しみが随伴してくる。

勉強するでしょ。勉強すると、それは楽しくなつてくる、本当に打ち込むというところ。だから、学ぶのも遊ぶのも一つなんです。「遊学」という言葉があるね。学を遊ぶ。学遊一如、遊学一如の世界です。始めは苦しいことがあるかもしれないが、打ち込んでいくうちに、その学ぶこと、あるいは仕事をするのが、何でも楽しくならなければウソなんです。妙境に入りますからね。妙境に入るとこれは楽しくなる。女の方が針仕事をしようが、縫い物をしようが、何でもこれが楽しくなる。台所のことであろうと。だから私は、

「福音は^{うきん}楽音だ」

と言っているでしょ。楽しくてしようがないんだ。だから、楽しみの哲学はいいんですよ、「エピグノーシス」は。楽しみ。あのギリシヤの「快樂説」というのは正しい意味でとると、



非常に大事な哲学なんです。いわゆる快樂を求めているのではない。人間は、楽しみがそこにないというと、参ってしまうんです。だからこれは、

「神さま、あなたの御業は本当にうれしくてしょうがない。我なんじの手わざをよろこびほこらん」

と。うれしいからそれを本当にほこりますと。

5 エホバよ汝のみわざは大なるかな

汝のもろもろの思念はいとふかし

この5節も大事な節だね。「汝のみわざ」ときたら今度は「汝の思念」ときたでしよ、

「なんと大いなるかな汝のみわざは、エホバよ」

と。「みわざ」という字は複数だな。

「非常に深いかな、あなたの思念は」

「マハツシャバー」「思い」という字は、「マハシエーブ」というと、もともとこの「思い」は非常に数学的な計算の深さというんです。それだから、現代語でいうとコンピューターのことを「マハシエーブ」という。そういうあなたの思いは何と深いかなと。

「わが思いは汝らの思いと異なり、天の地より高きがごとく」

「9 天の地よりたかきがごとくわが道はなんじらの道よりも高くわが思はなんじら

の思よりもたかし」(イザヤ55・9)

と、イザヤ書55章にあったけれども、あれがそうです。行為と思想と――神さまの思想もわざも人間の思想やわざとは違うんだ――非常に神中心になっている詩篇ですから。

6 無知者はしることなく

愚なるものは之をさとらず

神さまの世界は、神の靈に感じないと、神の智慧をただかかないと、わからない。無知者は、どんなにこの世の賢者も、これはわからない。この「無知者」とか「愚なるもの」というのはみんな信仰のない世界です。これはコリント前書の始めの方にパウロが言っている通り。この世の知識では神さまの世界はわからない。

7 悪きものは草のごとくもえいで

不義をおこなう衆庶はさかゆるとも

遂にはとこしえにほろびん

雑草のように栄えるかと思うけれども、それはダメだと。

「草は生え出るけれども、それはまた萎んでダメになってしまう」

ということはイザヤ書40章の始めの方にありましたね。あれと似たようなこと。

されどエホバよ

汝はとこしえに高処に

「ましませり」という言葉はない。よくヘブライ語は動詞が抜けてしまつて、かえって強い



ですけれども。「至高者」^{いとたかきもの}だから「高き処にのぼったところの」という意味ですね、「のぼる」という字から来てます。

9 エホバよ 吁^{ああ}なんじの仇^{あだ}あなんじの仇はほろびん
不義をおこなう者はことごとく散らされん

これは私の仇ではない。「汝の仇」なんです。神さまに逆らうサタンのなやつ。神さまに敵する者はやつつけられる。「不義をおこなう者」も同じこと。

10 されど汝^つわが角^つをたかくあげて

野の牛のつのごとくならしめたまえり

我^{あふ}はあたらしき膏^{あふ}をそそがれたり

この10節に「野の牛のつ」と出ているでしょ。

11 又わが目はわが仇につきて願えることを見

わが耳はわれにさからいておこりたつ

悪をなすものにつきて願えることをききたり

旧約的な考えがよくここには出てきますね。

12 義^{ただ}しきものは棕櫚^{しゅろ}の樹のごとく栄え

レバノンの香柏^{こうはく}のごとくそだつべし

13 エホバの宮にうえられしものは

われらの神の^{おおにわ}大庭にさかえん

14 かれらは^{としおい}年老てなお果をむすび

豊かにうるおい^{なほ}緑の色みちみちて

15 エホバの直^{なほ}きものなることを示すべし

エホバはわが^い巖なりエホバには不義なし

まあそういうわけですが。

●不合理なるが故に我信ず

今度は、本論に入ります。この年頭においてこの92篇を与えられたのは、私はなにか不思議でしょうがない。これは今度、『旧約拔粹』の中には必ず載つけます。

〔註…当初の著作集出版予定は第八巻『旧約拔粹』、第九巻『新約拔粹』、第十巻『随筆集』、第十一巻『詩歌集』、第十二巻『一日千年』であつたが、『旧約拔粹』及び『新約拔粹』は第十巻『聖書は大ドラマである』（1988年11月刊）に集約されて出版された。詩篇92篇は既刊の第四巻『詩篇珠玉集』（1980年1月刊）にもこの第十巻にも収録されていない〕

1 いとたかき者よエホバにかんしやし

聖名^{みな}をほめた^よたたるは善^よかな

神さまに感謝し聖名を讃^{たた}えるということは、我々にとって生涯の基調でなければならない



ですね。どんなことが起きても、感謝して、また聖名を讃える。テサロニケ書に、

「常に感謝して祈れ」

〔17 絶えず祈れ、18 凡てのことを感謝せよ〕（テサロニケ 5・17、18）

という言葉がある。感謝するということと、讃えることは結局、同じことなんです。しかも、讃え方は歌をうたう讃え方なんです。だから、讃美歌というのは、その意味で大事なんです。讃美する。讃美歌をうたいながら、その中に酔心地に入っていかなくてはね。それで、我々の生涯も結局、神讃美、神感謝です。ということは、いろいろなことを通して、「あなたがわかるんです。」

「神さま、私はいろんな苦難を通して、あなたがいよいよわかってきました」

と。「わかつてきた」というのは、からだです、頭ではないですよ。どんな体験をしても、行き着くところは神に行き着かなければダメ。キリストに行き着かなければダメです、窮極は。自分が失敗しても、どんな患難にあっても、行き着くところはキリスト。そうすると、この世の相対的なプラスもマイナスも本当のプラスになってしまう、みんな。

「これ一切の秘訣を得たり」

という世界なんです。そういうことは普通の道德の範囲ではできません。神さま相手の世界でなければ、できないです。

「こんな不公平なことをやって、神さまはいつたい有るものか？」

なんてなことをすぐ思うわけですね。頭でわかるような神さまは神さまではありません。もう、すぐそういう疑問をもつんだよね。

「なぜ、地震が起きて、善い人も倒れてしまうのか？」

なんて。ゲーテが6歳の時にリスボンの地震でもつてちよつとその点がゆらいだということがありましたけれども。

「なぜ、善い人を地震がきて殺してしまうのか。神さまはいらんだらうか？」

と。これ式な質問がすぐ出てくるんだ、普通の人には。

「よく信じられるね？」

なんて。

「わからないから、不合理だから、矛盾しているから、いよいよその奥の神を信じるんだ」

というところにこなければ、信仰は本ものにならない。だから、頭のいい人はなかなか信仰の世界には入れないです、すぐ理詰めでくるから。

「なぜ？」

ということ、それは哲学や学問では非常に大事ですよ、「なぜ？」ということは。信仰の世界では「なぜ？」ではないんです。

「参りました！」「降参しました！」



という世界です。

「その先の、その奥のあなた御意は端倪すべからず。だから信じます」ということ。

「不合理なるが故に我信す」(クレド・クイア・アプスルドゥム)

という有名な言葉があるね、テルトゥリアヌス(2世紀のキリスト教神学者)の。失敗しようが何しようが、人に悪口言われようが何しようが、一切を通してキリストに結論していく。これは始末がわるい――私みたいな始末のわるい男ですから――行きつまりを知らない。生き詰まりを知らないどころではない。いよいよもって力が出てくる。それがこの無の世界です。

昨日、ある人が訪ねてきて――私は忙しかつただけでも――話しているうちに、とにかく相手も興味を大いに感じて、それからお蕎麦をとってまた、もうこつちも時間を忘れて話して、大いにその青年を激励して帰しました。なかなか優秀な人ですから、これは必ず何かやり遂げるでしょう。

「小池先生の無の世界が少しずつ分かってきて、とても楽しくなってきました」

と言う。この「無」は普通の神学者には分からないから。「神の痛みの神学」なんかよりはもっと上ですから、こつちは。あの『痛みの神学』はいろんな外国語に訳されているね、結構です。

まあ私が向こう側に往つてから、どれだけの人が分かってくれるか。こちらはもう確信がある。というのは、

「無の主体はキリスト」

なんだから仕方がない。私が発明したのでも何でもない。キリストをなぜ、

「無即無限無量」

と言うかということが本当にキリストにぶつかって掴めたら、この「無」がわかるんです。私のは神学でも何でもありません。キリスト告白なんだ。そんな

「ワッショイ、ワッショイ」

なんていうのとは違うんだから。非常に静かです。一番深い強い祈りは

「沈黙の祈り」

ですよ。これからはもう祈禱会は沈黙でやろうかな。沈黙の祈りが一番深い、一番力強い。なぜそうかという、これを受けとるからです。無は無限無量のものを受けとる。お願いするのではない。受けとる。だから、これを私は

「本願」

と言う。「本願の効力」と言う。本願の効力がやって来るから。それはいわゆる人間的に熱っぽい祈りなんかとは桁が違う。

その境地に入ると、驚くべきことが起きる。こないだ岡山で起きたでしょ。そういうことは、



こつちが本当に無になって、キリストの力がくるから、エライことが起きる。私は、だから、
楽でしようがないです、自分で力りきむ必要がひとつもない。力んだらダメだから。

「さあ、そんな無はなかなか、そんな無の境地には行けません」
と、みんなそう言う。

「そんな悟っているのではないですよ。私は何も悟っていませんよ」
と私は言う。

「十字架を本当に受けとっているか」

ということだから。この十字架がいい加減になっているから、あるいは観念になっ
ているから、ダメなんです。

パウロの十字架はそんな十字架ではない。パウロは、サウロというのはパリサイの傲慢
な野郎だから、もうどうにもならん。だから、復活のキリストが彼をまずぶつ倒したんです、
はつきり。使徒行伝9章、22章、26章を読んでください。ぶつ倒されて、それから

「まいりました!」

と言って祈りこんだら、この十字架が現れてきた。これが土台であつた。だから、十字架
と聖霊は絶対に不可離である。

「⊕」

この私の図「十を○で囲んだ図」の○は聖霊です。

「小池先生とはどういうひとか?」

と問われたら、これ「○に十の印」を書いてください。こういう人だと。言葉は要らんです。
もう私は異言が爆発しそうだから、今こらえているけれども。そういう現実ですから。

●愛と信実

2 あしたに汝のいつくしみをあらわし

夜々よなよななんじの真実まことをあらわすに

3 十絃とおおのなりものと箏そうとをもちい

琴たえの妙なる音ねをもちいるはいと善よきかな

汝の愛しみを表し汝の信実まことを告白するのに、そのようにすることは誠にいいことだと。

愛も信実まことも同じことだ、さつき言った「信愛」は。キリストにおける神の愛、

「十字架・聖霊の愛」

を受けとることを「信」というんです。

「信仰」の「仰」の字は要らないんだ。この字を書くのは禍わざわいだよ、今まで熟して

「信仰、信仰」

というののもうよそう。こんな「仰」の字は要らないから。その中に即しなければダメだ、
その世界に。「即信」しなければダメなんです。もうはつきり革命的なことを言わなければ



しょうがないんだ、今までのありきたりな概念では。愛を受けとることを信というんです。「何かわからないけれども信じておこう」

と、そんなことではない。分からないどころではない。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ――キリストの福音――福音書を読んだら、そこにキリストの愛が言葉の中に、行為の中に全部――十字架の中に、復活の中に、昇天の中に――一切においてこのキリストの愛が表れている。だから、

「それを受けとることを信」

という。そうやって読むことを

「身読」
「身読」

という、身で読むこと――信仰の信の字を書いて「信読」でも、どっちでもいい――これを身読という。身で受けとること。からだで受けとらなければダメだ、全存在で受けとらなかつたら。ところが、みんな頭で受けとっている。論より証拠、それでは本ものにならない。私が説明するまでもない。自分で、

「これは本当の世界に入りましたか」

ということは、魂の世界は自分に対して誤魔化せないからね。

「何かまだまだ……」

という。「何かまだ」ということを正直に魂がささやいている。

「いやあもう、これでいいんです。もう全存在で讚美します！」

というところに来なければダメです。そうしたら、歌声も変わってくるんだよな。

神讚美が音楽の最初にして終わり、始めにして終わりなんです。神讚美をぬいているような音楽ではダメです。まあ世の中にあるたくさん演歌なんというものはそこまでいつてないものね。人間的な情緒の世界はなかなかよく表しているけれども、惜しいね。もうひとつ突き抜けなければ……

4 そはエホバよなんじその作為をもて

我をたのしませたまえり

我なんじの手のわざをよろこびほくらん「ほめん」

「愛しみとまこと」を、一か所引用しましょうかね、出エジプト記34章6節を開いてください。1節から、

「茲にエホバ、モーセに言いたまいけるは汝石の板二枚を前のごとくに斫
て作れ汝が砕きし

いっぺんぶつ壊したからね、不信の民をモーセが怒つて。それからまた作りなおした。

4 モーセすなわち石の板二枚を前のごとくに斫て造り 朝早く起きて手に二枚
石の板をとり エホバの命じたまいしごとくにシナイ山にのぼりゆけり⁵ エホ
バ雲の中にありて降り彼とともに其処に立ちて エホバの名を宣べたもう⁶ エ



ホバすなわち彼の前を過ぎて宣べたまわくエホバ、エホバ憐憫あり恩恵あり
ここに二つ書いてあるね。

怒ることの遅く恩恵と真実の大なる神

と書いてある。

7 恩恵を千代までも施し 悪と過と罪とを赦す者 又罰すべき者をば必ず赦すことをせず

という、厳しいことが出ている。9節に、

9 ……是は項の強き民なればなり (出エジプト34・1～9)

「お前たちはうなじこわき民である」なんてことが出ている。その6節です。

6 エホバ憐憫あり恩恵あり 怒ることの遅く恩恵と真実の大なる神

という。あとの「恩恵と真実」が、今の詩篇の「愛とまこと」と同じ字が使っている。「ヘセッド」と「エメス」あるいは「エムナー」です。

「楽器をもつて讃めたたえる」

というのは詩篇33篇にもよく出てますね。有名なところですよ。それから、黙示録4章11節。

「11『我らの主なる神よ、栄光と尊崇と能力とを受け給うは宜なり。汝は万物を造り

たまひ、万物は御意によりて存し、かつ造られたり』 (黙示録4・11)」

5 エホバよ汝のみわざは大なるかな

汝のもろもろの思念はいとふかし

さつき申し上げた通り。ゲーテがああ『ファウスト』の中でヨハネ伝第一章を訳すときに、やはり「意」(Sinn)という言葉を使っている。あなたの思いが、

「最初に思ひ」(Sinn)があった」

と。深い思いがあった。まだいかなと、

「力」(Kraft)があった」

と。もうひとつ言って、

「行為」(Tat)があった」

と。私が今、『一日千年』という第十卷〔註：後に『聖書は大ドラマである』に変更される〕を予告したでしょ。あれは365日、ヒルティの『眠られぬ夜のために』みたいな内容になる。それを今、もう元日から書き始めているんです、毎日。今年の一年間であればできてしまう。面白いよ、とっても。なにしろもう、蛸の足みたいに私は今活躍しているからね、書斎で。このことをやったり、あのことをやったりね、ああ、本当だよ(笑)。

それはヒルティも言っている通り、一つの仕事にうち込むことと、それからパツパツと対象を変えてやっていくことの、両面があつていいわけです。そうすると、くたびれない、飽きないです。ということは、それでありながら、一貫しているんです。一貫したものがあろう12時を過ぎてしまうよ、寝るのが。昨日だって、寝たのは2時だものな。眠くないんだ、



油がのってくるから。あんた方はいい気持で寝ているけれども。

何しろ始末のわるいひとです。いわゆる規則なんかありませんから。そういうところは、天野先生はカントみたいいに規則正しい生活ですけれども。『天野貞祐先生の生涯と思想』というのも大方書きあがったけれども、なかなか大したものだな。だけれども、やつぱりただ一つのこと「欠けている」、その点は惜しいけれどもね。

6 無知者はしることなく
おろか

愚なるものは之をさとらず

7 悪きものは草のごとくもえいで
あし

不義をおこなう衆庶はさかゆるとも
もろもろ

遂にはとこしえにほろびん
ついで

神さまを相手にしないものは馬鹿であるし、亡びていくし、ダメになる。

されどエホバよ汝はとこしえに高処にましませり
たかきところ

この「高処」というのは、なにも空間的に高いというのではなくて、高次元の世界、高次元界。神さまはもう絶対次元だ。至高次元界。パウロも「第三の天」に行ったね、コリント後書12章に出ている。あれは凄いんだ、「第三の天」というのは。仕方がない、「天」という言葉で言うよりか。

UFOなんていう、あれに乗ってかつてくる妙なやつは人類よりも次元の高い世界にいますよ。だから、あんな不思議なことができる。物理法則でなくてやつて来るからね、いわゆる物理法則でなくて。スウェーデンボルグ(1688～1772)はだいたいそういうことをもう予感していたらしい。とにかくちよつとスウェーデンボルグは凄いやつだ。

●野牛の角のごとく

9 エホバよ吁なんじの仇あなんじの仇はほろびん
ああ

不義をおこなう者はことごとく散らされん

10 されど汝わが角をたかくあげて
つの

野の牛のつのごとくならしめたまえり

我はあたらしき膏をそそがれたり
あふら

この10節は気をつけてください。「角」というのは「ケレン」という字ですけれども、「ケレン」という字は、「角」も表し、「光線」をも表す妙な言葉なんです。「角」のことは、サムエル前書2章、ハンナの祈りのところに出てくる。これはちよつと大事なところだ。サムエルのお母さんの祈りです。

「ハンナ禱りて言いはるは我心はエホバによりて喜び我角はエホバによりて高し
いの

ハンナは女のくせに、「わが角は」とは何ですか。



我^{わが}角はエホバによりて高し 我^{わが}口はわが敵の上にはりひらく 是は我^{わが}汝^{すくい}の救^{すくい}拯^{すくい}によりて楽しむが故なり

これもそうだ、楽しんでゐる。「わが角は」だつてさ。「角」は力を表す、生命力 (Lebenskraft)、生命の力を表す言葉なんです。10 節にも、

10 エホバと争^{はて}う者は破^く砕^だかれん エホバ天より 雷^{いかづち}を彼等の上にくだし エホバは地^{はて}の極^{さば}を審^{その}き 其王^{あづから}に力を与え 其膏^{あづから}そそぎし者の角を高くし給わん」(サム

エル前 2・1、10)

「膏^{あづから}そそぎし者の角を高くし給わん」

という。ミケランジェロがモーセを角が生えたような恰好にして描いている。あれは力を表している。力の象徴です。「わが角は」なんてね、普通に我々が読んだらちよつとおかしいんです、般若^{はんにゃ}かと思つて。女の人が何かちよつと調子が、妬^{ねた}んだり、怒^{いか}つたりすると、「あのひとは角が生えている」

と、そういう角とは違うよ(笑)。この「角」は神さまに祝福された象徴としての角だ。それが「わが角」です。このハンナの所でよく分かる。女性でもこんな言葉が使われる。

「野の牛のつのごとくならしめたまへり」

と書いてある。具体的な表現として「野の牛」。これは野牛^{やぎゅう}でなければダメなんです、飼われた牛では。野牛でなければ。野原で神さまに自由に生命をいただいている野牛。狼がなぜ強いかというと、みなあれは野犬だからです。あれも野犬なんだ。

日本人も野人^{やじん}でなければダメ。内村鑑三なんかは野人なんだ。そして本当に野に出てしまったからね、彼は。一高の教授をしていたときに、いわゆる「不敬事件」でもつて野に放たれてしまった。それから内村先生は凄^{すご}くなつたんだ。『基督信徒の慰め』なんていうあの素晴らしい本は名文だし、内容も力があるね。『余は如何にして基督信徒となりし乎』も『求安録』もみんなそれから出てきた。

我々は何をしていてもいいですよ。けれども、その本質^{はつ}は野的^やでなければダメですよ、野的^やでなければ。野でも山でもいいよ。山の好きな人は山的でもいい。海の好きな人は波的^{なみ}でもいい。要するに、大自然です。大自然的にならなくては。

「大自然的な生活」

我々はこの文明社会にいれば、それぞれのみんなお勤めがあつたり、いろんなことがありますがけれども、性格は、在り方そのものの質は、野的^やでなければダメです。環境にしばらくれていてはダメです、環境を乗り越えていなくては。水のように。

水は方円^{ほうえん}に従いながら溢れていく。ただぶち破るのではない。従いながら溢れているような在り方。泉のようにね。泉というのは素晴らしい。水は流れていつて、そしてそこを満たしながら、また溢れて進んでいく。湖のように静かと思つたら、今度は滝となつて落ちていく。岩に激してしぶきを飛ばす。水の旅の姿を見ていると、それが本当に人生だ。



それで、

「水は低きに流れ去る」

という、これが、その野的なその姿が「法」だという。素晴らしいね、この「法」という字は。水は低きに流れ去る。まあこの生きた真理というのは楽しいね、本当に。なにか

「信仰、信仰」

といって固まったようなのは困るよ、あの観念信仰は。私はこの92篇を、ある無教会の人の注釈をちよつと見たら、もうガッカリした。あいかわらずだなあと思った。信仰の或る観念に――

「信仰箇条でない」

と言いながら――もう観念にとらわれている、無教会は。キリストの預言者たちや、キリストの直弟子たちの次元はそんなものではないです。

だから、私は、この「牛」という字が特に野牛であることを字引に書いてあつて、大変うれしいわけです。「レエーム」という字です。野牛。野牛のごとくにね。野牛の角は非常に生き生きとして、そして光っているそう。光っている。つやがいい。つやがちがう。

これは教育問題とも係わるけれども、日本のこんな教育制度でがんじがらめになって、画一的であつて、もう本当に可哀相だよ、若い人たちは

「受験、受験」

でね。家の長女「孫娘」も今、受験勉強をやっている。学校なんか止めてしまつて、自分のやりたいことをやつて、生涯をそれでもつて突き抜けていく、そんな青年が出てきたつていいんですよ。

「大学なんかなんだ!」

というわけで。吉川英治みたいに。大学は台無し学だ。社会に出るためのひとつの資格のレッテルになっている。

「大学卒」

なんて下らないことを言つて。だから、大学を中退したやつに偉いやつがいるじゃないか。

亀井「亀井勝一郎(1907～1966)昭和期の文芸評論家、日本藝術院会員」さんもそうだし、漱石「夏目漱石(1867～1916)教師・小説家・評論家・英文学者・俳人」もそうです。

「じゃ、俺はもうやめた」

と。いいよ、やめて。そのかわり、でかしてくださいよ。神さまの神学校へ入らなくては。

まあ、どこに居ましても、本質はいつもそのような神と直結の、キリストと直結の世界で歩いていなくては。そうすると、その環境にありながら、しょつちゅう常に環境を改造していくし、創造していくし、乗り越えていくし、そういう人間です。

だから、

「野牛の角のいっく」



と。牛ではないです、これは野牛の角。今年は野牛の年であって、牛の年ではない。

「なぜ、あなたは野牛なんて言うんですか？」

なんて問われたら、大いに説明してやってください。飼われた牛ではダメだ、籠かごの中の鳥ではダメだと。うちに籠の中の鳥がいるけれども、あれを野に放しても、飛べないんだよなもう。そして自活できない。「野人」と書いたでしょ、あの『随想集』〔著作集第六巻、1982年12月刊〕に内村先生のことを。野牛的にならなければダメです。

「野牛の角のようにしてください」

と。「してください」ではない。してくださいだったんだ、

「野の牛のつのごとくならしめたまえり」

だから。

「我はあたらしき膏あぶらをそそがれたり」

と。それだからです、この「新しき膏」とは。この「新しき」という字は、「非常にフレッツシユな」という字です。

「新鮮な膏をそそがれた」

というのは

「聖霊」

です。この生き生きしたる聖霊を注がれたから、なぜ、野牛のような力が出てきたかというと、これは御霊の力です、要するに。「野牛の角」は、御霊の力の象徴だと思ってくださいよ。

だから、この10節は大事な節だと言う。今日の話の一つの中心です。もう一つ、焦点があるけれどもね。久しぶりで詩篇をやったが、詩篇はなかなかおもしろい。この詩篇は、1節から5節、6節から10節、11節から16節と、内容的に三段になっている。今度は第三段にくるわけだ。

「走れども疲れず、歩めども倦うまず」

〔31然はあれどエホバを俟望むものは新なる力をえん。また驚のごとく翼をはりての

ぼらん。走れどもつかれず歩めども倦まざるべし〕（イザヤ40・31）

なんていう、イザヤ書40章の終わりの方の有名な言葉があるでしょ。あれ式な、もう疲れをしらない、力より力へ進むような力は、この「野牛の角」的なものが、聖霊の力がそういうわけだという。

●豊かにうるおい緑の色みちみちて

11又わが目はわが仇につきて願えることを見

わが耳はわれにさからいておこりたつ

悪をなすものにつきて願えることをききたり

みんな、あなたがちゃんと仇を返してください。あなたが復讐してください。私の



方では何もしなくても。というようなことだよな。

「仇を返すは我にあり」

「1 エホバよ仇をかえすは汝にあり 神よ仇を報すはなんじにあり ねがわくは光をは

なちたまえ」(詩篇94・1)

と、他の詩篇に書いてある。だから、神さまは、

「お前はそんな仇討ちしなくていいから。私が悪い奴をやっつけてやるから」

と。新約の世界では、人に仇討ちなんか、もちろんしようとは思わない。

「責むる者のために祈れ」

と。これはみんな聖霊の愛がそれをさせる。相手がそれで悔改めないで、「悪かった」と言わなければ、それは地獄へ堕ちていく。仕方がない。自分で地獄へ堕ちていく。大いに勝ったようなつもりでも――これは黙示録に書いてあったでしょ――皆やつつけられる。

¹² 義しきものは棕櫚の樹のごとく栄え

レバノンの香柏のごとくぞだつべし

ちゃんとこれは対句になっているね、「棕櫚」と「香柏」。棕櫚の樹というのはナツメヤシと言ってもいいので、ナツメが実る。「ターマール」という字ですけれども、これは主として平野に生えている。しかも砂漠の中に。だから、棕櫚の陰に行くと、日陰で休みもし、その果がおいしいから――ずいぶん稔るんだよ――果がなつて非常に大事な樹なんです。

「レバノンの香柏」

は、高い山のレバノン――常に雪をいただいているような山――の崇高な櫟の樹です。木材としてこのレバノンの香柏は建築の上でも、こちらの檜みために素晴らしいんだ。「エレツズ」という字です。

棕櫚の樹とレバノンの香柏。平野の樹と山の樹。片一方は食べる方、もう片一方は建築の方。アラブとイスラエルは困ったもんだね、正直。宗教は、戦争してはいけないんだよ。どれだつていいじゃないか、それぞれ一生懸命でやっていけば。宗教が戦争になるくらい、また宗教に反することはないんですよ。

まあ私の詩の中にはいろんなものが出てきて、そんなものをみんな批判してやるから。もうスタートを切ったんですよ、詩の方は。始まっているんです。

¹³ エホバの宮にうえられしものは

われらの神の天庭にさかえん

これはもう特に神殿宗教の時代だから、エルサレムの神殿は非常に礼拝の中心になっていますから、それでこういう言葉が出てくるわけです。

「神の天庭にさかえん」

と。これはやっぱり素晴らしい苗代ができるんだね、そこに。そこでもっていい野菜ができる。これは野菜の方です。



「水の流れのほとりに植えし樹の期に至りて果を結ぶ」

〔3 かかる人は水流のほとりにうえし樹の期にいたりて実をむすび 葉もまた凋まざるごとくその作ところ皆さかえん〕（詩篇1・3）

というあの詩篇一篇を思わせるようなところもあるね。

それから、14節がもう一つ別な中心になる。だから、10節と14節だね。始めの方では、もちろん第1節。1節と10節と14節だね。

14 かれらは年老てなお果をむすび

豊かにうるおい緑の色みちみちて

エバ―グリーンであると。

15 エホバの直きものなることを示すべし

エホバはわが厳なりエホバには不義なし

14節と15節は離すことができません。この15節の訳し方はあまりうまくない。

「エホバは直きものにして、わが厳なること、不義なきことを証示する」

ということです。向こうの英語の註でしたけれども、こここのところに、

「80歳までちょうど50年間働いて、80歳になったけれども、なおいいよもつてその人は仕事をする」

というようなことが書いてあつて、まるで私のことを言っているようで、びっくりした。そんなことが書いてあつた。

「豊かにうるおいて、緑の色みちみちて」

というんだからね、これ。詩篇71篇9節に、

「わが年老ぬるとき我をすてたもうなかれ わが力おとろうるとき我をはなれ

たもうなかれ」（詩篇71・9）

と言って、

「年が老いるとだいぶ衰えるから、何とかしてくれ」

とここに書いてあるけれども、これではないんです。詩篇71篇9節でもなければ、伝道の書の12章11節、

「1 汝の少き日に汝の造主を記えよ 即ち悪き日の来り 年のよりて 我は早何も樂しむところ無しと言うにいたらざる先」（伝道の書12・1）

でもなければ――みんなそれはダメなんだ――それから詩篇90篇10節を見ると、

「10 われらが年をふる日は七十歳にすぎず あるいは壮やかにして八十歳にいたらんされどその誇るところはただ勤労とかなしみとのみ その去りゆくこと

速かにしてわれらもまた飛去れり」（詩篇90・10）

これは情けないことを言っている。これもダメ。この詩篇92篇14節は凄いんだ。これに応ずるのはさすがにやはりイザヤ書だね。イザヤ書65章、これは凄い。これにかなければ



ダメなんだ。イザヤ書65章20節、

「20日数わずかにして死ぬる嬰兒みどりごといのちの日をみたさざる老人としよりとはその中にまたあることなかるべし

そんな老人も、そんな乳飲み子で死ぬのも、そんなことはこの世界ではないと。

百歳にて死ぬるものも尚なおわかしとせられ 百歳にて死ぬるものを誼のろわれたる罪人つみびととすべし」(イザヤ65・20)

百歳だつてダメだ、百二十まで行けと。どこかに「百二十」と書いてにであつたよ。

「3エホバいたまひけるは我靈永く人と争わじ 其は彼も肉なればなり 然ど彼の日は百二十年なるべし」(創世記6・3)

「7モーセはその死たる時百二十歳なりしがその目は矇くらまず その氣力衰えざりき」(申命記34・7)

要するに、百歳でもダメなんだ。もつと凄いところに行く、ということだね。

「新しき天と新しき地を創造する」

と、17節に書いてあるでしょ。

「17視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す 人さきものを記念することなく之をその心におもひ出いづることなし」(イザヤ65・17)

と。詩篇71篇14節は凄いところだ、

「14されど我はたえず望みをいだきて いやますます汝をほめたたえん 15わが口はひねもす汝の義となんじの救いとをかたらん

この義と救いとは同じことですよ。

われその数をしらざればなり 16われは主エホバの大能の事跡みわざをたずさえゆか

ん
たずさえゆくんですよ。

われは只ただなんじの義のみをかたらん

こういう言葉があると、観念信仰はすぐ義というものを観念的にとってしまつて、

「神さまの義だけだ」

と言つて、観念的にだけ受けとる。そうじゃないですよ、この

「汝の義のみかたらん」

というのは。

「汝の義がいかに自分に与えられてくるか」
と、その角度があるわけです。

17神よなんじわれを幼少わかより教えたまへり われ今にいたるまで汝のくすしき事跡みわざをのべつたえたり 18神よねがわくはわれ老いて頭髮かみげしろくになるとも我がなんじの力つぎを次代つぎのよにのべつたえなんじの大能たいのうを世にうまれいづる凡すべのものに

宣伝^{のべつた}うるまで我をはなれ給うなかれ」(詩篇71・14、18)

という、非常にさかんな句です。71篇のここところは参考にしておくといいね。

それから、こないだクリスマスで読んだところの、あのシメオンとハンナの――ハンナという女預言者、あれは凄いいね――これはみんなそうです。これはみんな新しき、瑞々^{みずみず}しい聖霊をそそがれて――あの10節の――それだから、

「年老いてなお果を結び」

というのは、どんどんわがが進んでいく。果を結ぶのは神さまの栄光の現れなんですから、この果は。果を結び、

「豊かにうるおい」

だ、しかも。

「緑の色みちみちて」

という。まあ片井君に言わせれば無農薬の野菜だよな。そういう瑞々しくて本当に内容が新鮮で、無害である。無害どころではない、生命を大いに与える。

●永遠の青年

世界中が引っくり返って、ぶつ壊れてしまうような、原爆は――前に海に棄てたんだろ、あれがまた魚に害をしている――棄てようがないんだ、この原爆というやつは。これは宇宙の空間に棄てなければダメ。宇宙の空間にぶつ放すようなことを考えなくてはいかん。どんどん宇宙に棄ててしまう。まあ宇宙はでっかいから大丈夫だよ、地球から離れていけば。それくらいのことを今度は、今の科学は進んでいるんだから、やらなければダメだ。

「もうみんなこれは宇宙に棄てようではないか」

と。私の詩ではそれを書いてやるから。第三次戦争をくい止めるような詩だからね。

「本当の真理の世界は緑だ。単なる理論の世界は灰色だ」

と、ゲーテが言っている通り。愉快だな、あのゲーテというやつは。

皆さん、本当にそこらのキリスト教とは違うんですから。武蔵野〔幕屋〕はキリスト教の原始の世界だから。「原始福音」というけれども、あれは私が言い出した言葉なんですよ。

「福音の原始に還れ」

というスローガンを――手島君と関根君と二人で講演会をやった時に――あのスローガンを書いたのは私なんです。それから手島さんが

「原始福音、原始福音」

と言いだした。

「幕屋」

だってそうなんだ。みんな私がイニシアチブをとって言った。これはみんな上からくる閃^{ひらめ}きで私は言っているんだからね。



まあいいよ、今はどうであつても。この大詩篇が出たら、もう文句なしだから。12年かかる。校正して推考して本になるのは、それからまだ2年先だ。14年あと。1999年のノストラムスの預言の爆発がくるちよつと前にできる(笑)『霊界の星々』(遺稿詩集1998年8月刊)。お伽話^{とぎばなし}みたいなことを言っている。それはもう大丈夫、書ける自信が湧いてきました。自信ならざる天^{てん}信^{しん}が。これは緑の色が生命。だから、これは老いを知らない。永遠の生命になる。それは肉体はどうであつても、

「内なる人は日々に新たなり」

とパウロが言つた、それですから。

「そんなこと言つたつて、先生の頭はだいぶ白くなつてきた」

なんて。そうだよ。今に真つ白になる。さしつかえない。だけれども、いよいよ白光りしてくる(笑)。まあ冗談ばかり言つている。

そういう、このキリストの御霊は、これはもう他に替えられないですからね。

シュライエルマツハー「フリードリヒ・シュライマツハー (Friedrich Schleiermacher 1768～1834) ドイツの敬虔主義神学者、哲学者、文献学者」がああ宗教のあそこでもつて書いているけれども、

“Ich schwöre mir ewige Jugend.”

「私は自分に対して永遠の青年を誓つ」

と。さすがにシュライエルマツハーだね。私が言いたいような言葉です。

「私は永遠の青年だよ、断言するよ」

という。シュライエルマツハーもかなり誤解されていますね。素晴らしい。

「宗教は絶対帰依の感情である」

ということと言つた。あゝの「感情」はただの感情ではない。ゲートが、

「ゲフュール イスト アッレス」 (Gefühl ist alles.)

「情感が一切だ」

と言つたあの「ゲフュール」 (Gefühl 情感、体感、触感、感覚) です。あれは、

「体感が一切である。体^{からだ}で感ずることが一切である」

という。我々は空気を体で感じています、飲んでいます、吸っています、見えないけれども。魂がこの魂を通して霊気を感じるようになってきたら、これが本もの。聖霊がそのことをさせてくれる。聖霊を受けとると、いろんなことに遭えばあうほど、逆に力がくる。逆比例するんだからありがたい。あまり外側の条件が良すぎると、眠ってしまう。

●聖霊の力

14 かれらは年老^{としおい}てなお果^みをむすび

豊かにうるおい緑の色みちみちて



15 エホバの直なおきものなることを示すべし

エホバはわが巖いわなりエホバには不義なし

「緑の色みちみちて、エホバが直あかしきものであること、またわが巖であり不義なきことを証する」

というんです、この自分は。だから、そのような事態は、自分が偉いのも強くもなったのも何でもありません。そのような「エバ・グリーン」「永遠に緑」であるような、「エーヴィゲ・ユー・ゲント」「永遠に青年」であるような、そういうようなことは神さまから来ている力なんだ、神さまから来ている緑なんだ。神さまから来ている力、生命によって、果が実っているだけのはなしで、私が自分で実らしているのではないんだと。

だから、14節は15節の身証を、身でもって証していることを告白しているわけです。それを、観念信仰はそう取らない。

「神さまは義である」

ということだけで、自分とは関係のないような意味で立ててしまつて、そのところはバラバラになっている。ダメだよ、それでは。そういう解釈の仕方をしているから、情けないなと思つてね。

「これは神を義としているんだ」

なんてね、何を言っているかと。いわゆる「神を義としている」のではない。

「神の義が与えられてこそいつまでも緑している。その姿自身が神の力を、義を、ただしさを、その力を受けとつて証している」

と、その受けとる事態。とにかく

「信仰、信仰」

と言つて、ただ神だけを観念的に信じ、キリストだけを観念的に信じて、

「それによつて義とされる」

なんて、呑気なことを言っているからね。まあ長いこと私は無教会でその角度だった。ダメなんだ、その角度では。一つにならなければ。キリストの弟子たちはみんなキリストと一つになって証したではないですか。だから、

「エン・クリスト」「キリストの中に」

とパウロが言つたではないですか。

「われキリストの中にうち、キリストわが中に」

という。この関係なくして何の信ぞやと。

「この関係を現実ならしめるものは聖霊である。その土台は、十字架ですつかりすつ飛ばされている事態だぞ」

ということ。ところが、十字架ですつ飛ばされてないから。

「すつ飛ばされてしまつたら、どうなるか？」



なんて思う。それは言葉だよ、

「すつ飛ばされている」

という言葉は。

「自分がもうない」

ということは、今度は、

「我なき我がそこに本当にある」

この「我なき我」という我は「梵我^{ぼんが}」の我です、仏教的に言うなら。

「天上天下唯我独尊」

という。「唯だ我だけが尊い」というこの「我」は「梵我」ですから、「宇宙我」ですから、宇宙我だけが尊いので、「小さな我」なんて、そんな相対的な我が尊いなんて、そんなことは言いつこないんだ、お釈迦さんは。

「それを本当に体得するまではダメだ。私は八万四千の法を説いたけれども、一つも説かなかった」

と逆説的なことを言ったのは、

「それを自分で体験してくれ。でなければ、いくらこつちがしゃべったってダメなんだから」

ということだ。聖霊は、聖霊の象徴がこの

「野牛の角」

ですから。御霊の力です。ああ、ここにも面白い言葉があるな。詩篇89篇24節、

「²⁴されどわが真実^{まこと}とわが憐憫^{あわれみ}とは

信と愛とは、

ダビデとともに居りわが名によりて「名にありて」その角はたくあげられん」

(詩篇89・24)

これは大事な節だね。詩篇89篇24節はこれにふさわしい。「角」という字が出てくる。

「その角はたくあげられん」

と。「力」というのはそういう聖霊の力ですから。聖霊の力は、智慧とも働き、愛とも働き、あらゆる働き方をする。そして、我々のするいろんなわざにおいて、それが現れる原動力となる。それを野牛の力、「野牛の角」と言っている。

だから、人に飼われていない、空を飛んでいる鳥というものはいいものだよな、本当に。自由自在で。私は人間でなければ鳥になりたい。鷺なんていうやつはそうだな。ドイツ人が鷺を好きなのは、そうなんだ。嵐のあとに飛び立って、高く昇っていく。あのフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』の中にも出てくるよ、そのことが。ナポレオンに荒らされて、惨憺たるときに、……〔以降録音切れ〕……

